

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十八年九月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十三巻第五号（通巻第一四九号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第149号

9. 2006

# 固 噤 み

品川 鈴子

下野しもつけの釣瓶落しを汽車で追ふ

観覧車つるべ落しの引つ掛かる

世話係老がつとめる敬老日

ロボットを遊び相手に敬老日



曼珠沙華追悼集の初校刷とどく  
稿想のまた転じつつ梨を剥く  
マンションに連衆千草摘み来たる  
母もせし取り越し苦勞そぞろ寒  
焼栗の片割れ供ふ旧婚日  
綻ばずじまひ柘榴の固嚙み



# 玉 鈴

兵庫 八木柊一郎

地に還る夜こそ白き沙羅の花  
尺蠖の測るは人の心かも  
病める眼にも紀州は遠し桐の花  
なかぞらにひらく朴の香地に下りず  
終の日を六甲<sup>むつ</sup>の端山に夜干梅

東京 安田とし子

浚渫の舳先ならびし麦の秋  
糠床を均してまじの風入るる  
瓜揉みて言葉ゆたかに高階住み  
つくねんと川を見下ろす梅雨鳥  
潮の香を俎上に満たし海鞘を剥ぐ

愛媛 梁瀬照恵

薫風のしきりに通る砂の寺院  
青嵐に刺ある言葉聞き流す  
大風呂敷広げて扇子早使ひ  
春月や明日が今日となる時報

# 吟

兵庫 山口庸子

花空木羽を切られし鶴  
青鷺に罾盗らるる鶴  
ト口箱は天道虫のかくれ宿  
石垣になほ香を残す忍冬  
ついそこで啼く不如帰見えぬまま

神奈川 山崎辰見

義経の緋裏の鎧青葉騷  
琵琶湖より嵯峨野あたりへ虹の橋  
乱高下激しき株働雲の峰  
面取れば胴打たれたる夏木立  
今年また丈つめ母の初袷

香川 合川月林子

植田ながむ窓際族と言はれぬて  
姉女房らしくなりたる洗ひ髪  
十指もて梳けば乾ける洗ひ髪  
時の日やデジタル時計ばかりなる

大阪 赤木真理

七変化いつも誰かに恋をして  
夏衣彼の姿を盗み見て  
ソーダ水友達のまま又逢ひて  
背フラスナー閉ぢてもらひてパリー祭  
引き際を心得てゐて夏衣

兵庫 秋田直己

雨くサンバパレード神戸祭  
更衣窮屈となる胴廻り  
ぼうたんを賞め商談の応接間  
機上より富士を眺めつ新茶飲む  
ナホトカへ向ふ列車に夏の月

愛媛 足利罇子

抜歯してポタージュ啜る春一日  
嬰兒と添寝の欠伸うららかに  
母の日ややつと傘寿に辿りつく  
鱒船吃水深く帰りけり  
測量の計器かつぎて葛の崖

愛媛 足利徹

奥伊予の男くどきの田植唄  
お田植祭まだ見物のあらはれず  
観光バス来てお田植始まりぬ  
早乙女の植糸しは猫の額ほど  
水口に流れを分かつ余り苗

大阪 尼寄太一郎

極楽の花や如何にと旅立たる  
一人闕け二人となりぬ官女雛  
老妻の稀なる外出春裕  
噓して泰然自若獅子つ鼻  
フラミンゴ春光散らす胴震ひ

兵庫 荒木治代

蕙青し駅につながる抜け小路  
吟じられ描かれもして薔薇崩る  
開港のロビー華やぐ夏帽子  
客どつと入りて窮屈ソーダ水  
新しき網戸に浜の風しきり

# 薬草歳時記

(二四八) シュウカイドウ (秋海棠)

## 三輪慶子

汝をそこにいたしめてよし秋海棠 富安 風生

この句からは秋海棠の花にも似て楚楚とした美人の立ち姿を想像することができます。この花が明治の文豪幸田露伴の筆にかかる次のようになるのです。

『秋海棠は丈の倭きに似ず、葉のおうようにて花のしおらしきものなり、たとえば貴ききわにあらぬ女の思いのほかに心ざまゆるらかにて我はと思ひあがりたる様もなく、人に越えたる美しさをそなえたらんごとし。北に向きたる小さき書齋の窓の下などに此の花咲きて、緑の苔の厚う閉じたる地をおおいたる、いかにも物さびて住む人の人柄もすずしげに思ひなざる 幸田露伴』

シュウカイドウ科 しゅうかいどう属の多年草。冬には地上部は枯れますが毎年新しい塊茎をつくって越冬します。花の後零余子(珠芽)をつけ、それが落ちてても増えるので、北側の庭に絶えることがないのです。

この花がうちの庭に咲くようになって二十年以上になりましょうか。知人からの一株が元で、今では裏庭いっぱいになっていきます。同じシュウカイドウ科のベゴニアは日当たりのいいところがよくて夏の季語ですが、シュウカイドウは半日陰の湿った土が好きなのです。

雌雄同株で花梗の先にまず雄花をつけ、二又分岐をしながら雄花を咲き進め、最後に数個の雌花を垂らします。下向きに咲く花は木立ベゴニアのようなたつぷりの花房ではありませんが、それがまた茶庭に好まれるところでしょう。中国原産で寛永年間に長崎へ入ったと記録されています。葉はゆがんだ卵型なので、エレファント・イヤーとも云われ、花言葉は「片思い」「不調和」

花と根茎を含めて全草が薬用になります。花時の全草は約一%のシュウ酸を含みます。民間療法では健胃剤、腫れ止め、喉の痛みなどに使われます。しかし大量に服用するとカルシウム欠乏症を起こします。二、三節生葉を切って煎じてみましたら、茎葉はとろとろになって、かなり酸っぱい。煎汁は薄いピンクで、ほのかな酸味がありました。お茶のように大量には飲めませんが、夏の飲み物にはぴったりです。うがいしますと収斂効果が体感できます。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

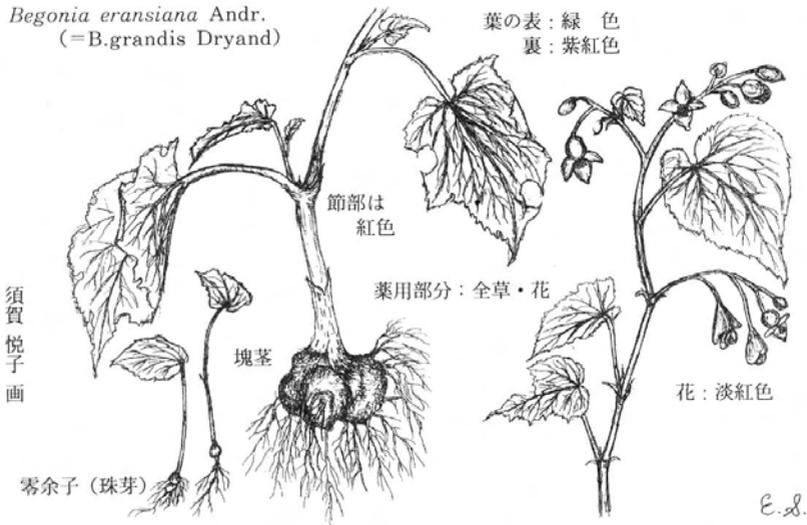
「中薬大辞典」 小学館

著者略歴 神戸薬科大学卒

シュウカイドウ 秋海棠

(シュウカイドウ属)(しゅうかいどう科)

*Begonia eransiana* Andr.  
(=*B.grandis* Dryand)



須賀悦子画

零余子(珠芽)

E.S.

伏して見る秋海棠の木末かな	正岡	子規
刈り伏せて節々高し秋海棠	原	石鼎
そのほとり秋海棠の濡れ易し	後藤	夜半
節々に秋海棠の紅にじみ	高浜	虚子
病める手の爪美しや秋海棠	杉田	久女
書を愛し秋海棠を愛すかな	山口	青邨
秋海棠眉目よく古ぶ仏たち	瀧	春一
女去って秋海棠の茎紅し	沢木	欣一
秋海棠露のあかるさちりばめて	柴田	白葉女
手洗鉢記憶のままや秋海棠	池田	かよ

ぐらっけ

# 鈴の奏

品川鈴子選

巢燕に未だ信頼されずをり 兵庫 岩崎可代子

子燕はカルテットにて餌をねだる  
香水でする占ひに人だから

季寄せ買ふのみに出かける梅雨晴間

衣袴と言ふ軍装ありぬ更衣 兵庫 山口 博通

丹田も露はな乙女黒日傘  
臍出して闊歩の乙女夏帽子

病妻の気分もやもや梅雨に入る  
左右左の茅の輪くぐりを並び待つ 兵庫 後藤 洋子

猿岩の果ては卯浪に壱岐の國  
壱岐の宿主の釣りし鱒づくし

上用干し着物の柄は夢二風  
気まずさもいつしか解けし蚩狩 愛媛 福島 松子

ブイヨンの薄き浮き実や雲の峰  
遠慮がちに話切り出す青葉木菟

パナマ帽杖は小脇にエスコート  
手漕ぎ舟休めて見ゆる鳩浮巢 大阪 河村 武信

細き首産湯つかひし鳩の子か

水面分け青葭蔭の空のぞく

青葭に単衣の女浮き立ちぬ

さくらんぼ珠玉の如く並べらる 兵庫 片山八重子

七変化佛母のそばで濡れており

噴水の休む間もなく玉と散る

庭隅に父の好みし矢筈草 庭隅に父の好みし矢筈草 正木 泰子

下宿子と無口な父が五月病 兵庫

旅支度はかどらぬまま梅雨に入る

小梅漬く下宿の孫に送るべく

芍薬に傘さしかけし冠木門

梅雨入りの校庭あさる鴉二羽 兵庫 水野 弘

梅雨晴間羽を搔き合う番鳩

つばくらめ湖すれすれの水しぶき

無花果の熟れるを待たず啄まれ

囲まれし蛙動かず薄目して 兵庫 村田とくみ

月下美人さげて深夜の来訪者

ハンカチを叔父はとっさの蚩籠  
小さき指仔猫の耳に爪を立て

兵庫 林 美智

いたむ膝なだめすかしつ登山靴  
みちのくにカンカン帽と出会ひけり

白杖の人に手を添ふ青葉闇  
鹿の子百合咲いておつとの忌日なる

青葉木菟生家の屋敷林にて  
青葉木菟「ぼろ着て奉公」と鳴くと祖母

紫陽花に身をかしげ行く切り通し  
カーネーションより父の日の黄バラ好き

分校の生徒は五人独活の花  
病母ありて麦の穂波も琥珀色

夏瘦せや父の形見の背広着る  
白服のオールドボーイジャズの店

息吹けば回り出しそうクレマチス  
百日紅忍び返しの櫓跡

日雷感知ブザーに気付かれし  
夏の野に塩舐める牛口忙し

分封の蜜蜂の群松覆う  
見も知らぬ人も親切苗売場

「どなたさま」姉に聞かざる梅雨じめり

兵庫 鈴木 愛子

兵庫 松本 恒司

兵庫 野澤 光代

兵庫 水上 貞子

兵庫 木野 裕美

機銃掃射思い出しをり麦の秋  
尋ね来る人も居らねど更衣  
姑の遺せし反物江戸浴衣  
着物には縫はず暖簾に江戸浴衣  
来し姪に十粒持たせるさくらんぼ  
お互いにおぼろの中の露天風呂

あこがれし雪溪間近山の宿  
山の宿身幅の余る宿浴衣  
風躲し葉陰の実梅育ちをり  
豊作の実梅近所へ分かちけり  
鉄線花スターの如く輝やけり  
花菖蒲棹差す娘等の緋  
ゆすらうめたわゝになりし郷愁を  
母の日に亡き母好みのかすみ草  
斑蝶胸に止まりぬ母の日に  
快晴に大物洗い五月尽  
いそいそと獲物を担ぎ蟻の列  
古稀と喜寿長生き願ひ新茶汲む  
浅草も銀座も好きで心太  
多彩なる静寂薔薇の園にあり  
運転は若葉のマーク青葉闇

愛媛 羽生きよみ

埼玉 小田 知人

松本 清川

山形 麗子

東京 片野 光子

木野 裕美

# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句 十五句 瀬口 ゆみ子

\* 選句は全て 品川 鈴子

季寄せ買ふのみに出かける梅雨晴間 岩崎可代子

杵岐の宿主の釣りし鰯づくし 後藤 洋子

雨の日ばかり続き、たまに晴れても梅雨はまだまだ明け  
そうにも無い。当分家に足止めならば、本腰いれて俳句と  
取り組んでみようかと思ひ立つ。その手始めとして別種類  
の歳時記も揃えたくて、晴れ間を待ち構えて外出。家事で  
主婦が一番忙しい貴重な梅雨晴間だが、季寄せを優先させ  
る心意気。

衣袴と言ふ軍装ありぬ更衣 山口 博通

戦時中は日常生活では外国語を排していましたが、軍  
服もズボンを衣袴・袴下(ズボン下)、そして上着は上衣  
等と呼びました。その響きに、かえって凛々しく感じたの  
が不思議。これらは総てお上からの大切な預かり物として、  
手まめに繕い員数点検も厳しかったとか。軍装に憧れる女  
性や少年もいましたが、伸び伸びと衣更えする度に、当時  
の堅苦しさを想わずには居られない世代も在ります。

九州と朝鮮との間の海峡には、飛び石のように対馬列島  
と杵岐の島がある。もとは杵岐国だったが、いまは長崎県  
杵岐郡に属する。魚介類の宝庫として島民は海に親しんで  
いる。宿の主人も釣りの腕前を發揮して、遠来の客のため  
に、鰯をどっさり提供。どの料理にも活きの良い鰯が主  
役となり、謂わば鰯づくしの献立に舌鼓を打つ都会の客。  
三十五年前に独り句を作りに行つた私も、荒海へお産の前  
日まで潜る海女達に心を打たれました。

気まずさもいつしか解けし蛍狩 福島 松子

何か知ら気まずさを引き摺つての蛍狩。闇の中で明滅す  
る幻想的な蛍の光を目にし、手にしようと追ううちに、い  
つの間にか解けていったわだかまり。自然界の癒しの効果。  
蛍が仲立ちとなり、互いの距離が近づいたことでしょ。